

4 映像事業

1920年代に興ったアヴァンギャルド映画を源流とする、映像表現の可能性を拡張するような実験的な動向に着目し、上映会の開催やオリジナル映像作品制作などの事業を行った。

愛知県美術館コレクション作品 キドラット・タヒミック『フィリピンふんどし 日本の夏』上映会

「あいちトリエンナーレ2016」映像プログラムに新作長編『バリクバヤン#1』(2015年)の出品が決まった、フィリピンの先駆的インディペンデント映画作家キドラット・タヒミックが監督した『フィリピンふんどし 日本の夏』(1996年、愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品第5弾)などを上映した。

日時：2016年6月19日(日)午後2時～

会場：アートスペースA(愛知芸術文化センター12階)

入場者：15人

第21回アートフィルム・フェスティバル

「日本で洋画、どこまで洋画？」展関連プログラム、特集プログラム「水のイメージ」を実施した。また愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品の最新作である、田村友一郎『アポロンの背中』(2016年、シリーズ第25弾)を初公開するとともに、作家によるトークを行った。

会期：2016年11月18日(金)～11月25日(金)＊7日間開催(11月21日(月)休映、上映時間は日により異なる)

会場：アートスペースA

入場者：434人(延べ)

アーティストトーク：2016年11月19日(土)

午後2時～3時30分(田村友一郎『アポロンの背中』初公開終了後 参加者35人)

作家：田村友一郎

聞き手：越後谷卓司(愛知県美術館主任学芸員)



アーティストトーク

愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品の制作

草野なつかを担当作家に選出し、シリーズ通算第26弾『王国(あるいはその家について)』の制作を行った。

本シリーズは、“身体”を統一テーマに様々な作品を生み出してきたが、本作では、映画における“演技”とは何か、演ずることは役者の身体やこころにどのように影響するのかという、映画の根本的な命題を考察することを試みた。

